織田信雄（のぶかつ）　篇２

信雄の野望

信雄は、１５７８年（天正６）に伊賀国（三重県伊賀市・名張市）に侵攻しようと考えます。伊賀国は、強大な支配者はおらず、小さな勢力の豪族が集まった連合体のような支配体制のため、その状況をみて自分でも侵攻できると考えたのか、家臣を派遣し、丸山城を築城させます。しかし、築城に反発した伊賀の豪族たちは、築城途中の丸山城を攻撃し信雄の家臣を追い出します。それに業を煮やした信雄は、総勢1万あまりを率いて侵攻を開始しますが、豪族たちの反攻で失敗に終わります。

その失敗の知らせは、信長のもとにも届き、再度伊賀国へ侵攻するよう信雄に命じます。１５８１年（天正８）に総勢4万４千あまり（その中には、宇陀三将も参加）を率いて再度侵攻した結果、伊賀国は、平定されます。

その翌年、信長は、明智光秀によって殺されました。信雄は、父の敵を討つため伊勢国から京の都を目指しますが、伊賀国では一揆がおこり、滋賀県方面でも援軍の要請があり、京までいける状況ではありませんでした。その間に中国地方にいた豊臣秀吉が近畿地方まで引き返し明智光秀を戦いで破ります。その後、信雄は、信長の領土であった尾張国（愛知県西部）を領土とすることができましたが、織田家の運営は、家臣の秀吉や柴田勝家等の有力な家臣に任されることになります。

秀吉と勝家の間で戦が起きると信雄は秀吉方につきますが、秀吉は勝利したことで、織田家を実質的に乗っ取ります。信雄はこれを快く思っていませんでした。次回は、その後起こった秀吉と信雄の戦に触れていきたいと思います。